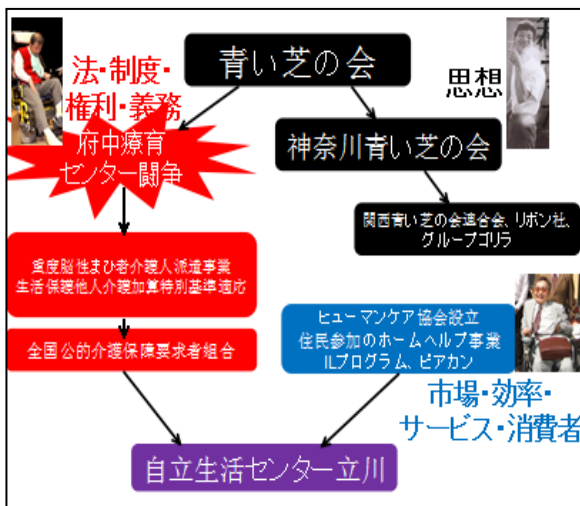
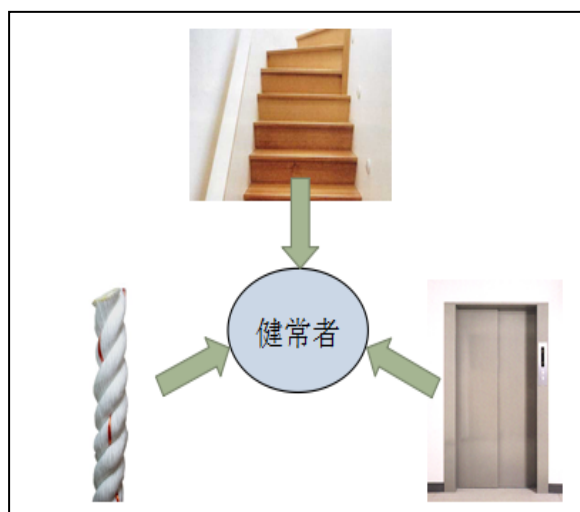


依存と自立

熊谷 晋一郎さん（東京大学先端科学技術研究センター）



依存症に関心をもつように
ーこれまでの取り組みー

- ◆慢性疼痛と依存症
- ◆刑務所の当事者研究
- ◆依存症を持つ母親による子育ての当事者研究

5

物質使用障害(Substance Use Disorder) DSM-5

重症度についての特定
中等度(Moderate): 基準の2つか3つを満たす
重度(Severe): 基準の4つ以上を満たす

診断されれば特定は止

WHAT (何をを使うか) ではなく HOW (どのように使うか) で定義

経過の特定用語(注釈については解説を参照)

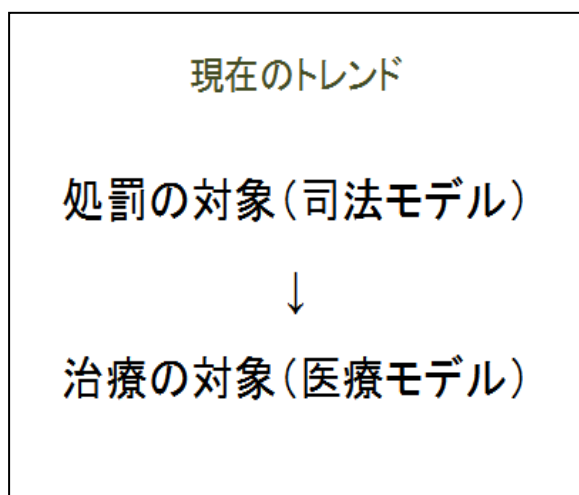
- 早期完全寛解
- 早期部分寛解
- 持続完全寛解
- 持続部分寛解
- アゴニストによる治療中
- 管理された環境下にある



Global Commission on Drug Policy (GCDP)

“The global war on drugs has failed, with devastating consequences for individuals and societies around the world.”

George P. Shultz and Paul A. Volcker (June, 11th, 2011).
“A Real Debate About Drug Policy”. The Wall Street Journal

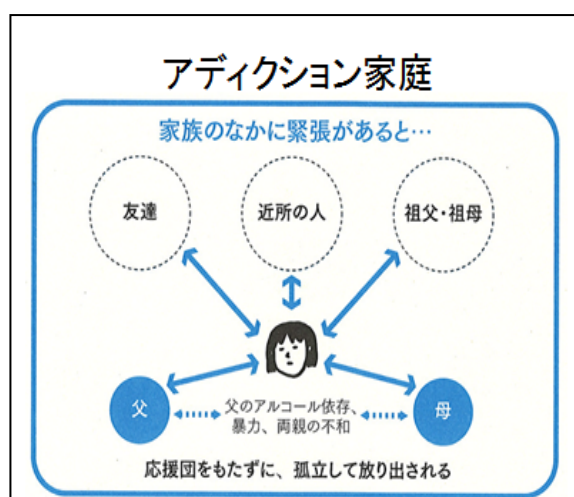


トラウマとアディクション

- 外来を受診する依存症患者の約半数が心的外傷後ストレス障害(PTSD)の診断を満たしている(Brady et al., 2004)
- PTSDの合併によって依存症の予後が悪くなる(Simpson et al., 2012)
- PTSDの症状を和らげるための自己対処法として依存症をとらえるモデルの提案(Khantzian, 1999)。

社会経済的排除や差別の影響

- アメリカに住む民族的マイノリティを対象に、社会経済的な状況や、主観的な被差別感が薬物依存症に関連しているかどうかを調べた調査によると、当事者の被差別感には有意に薬物依存症に関連しており、とりわけその関連は、アジア系の低所得層と教育達成度の低いヒスパニックの人々において顕著だった(Lo & Cheng, 2012)。
- Thomténらはストックホルムに住む2,300人の女性(18-64歳)を対象に、前向きパネル調査(12か月間のインタビューを挟んだ2回の測定)を行い、ロジスティック回帰分析によって社会経済的地位(Socioeconomic State: SES)と疼痛の関連を調査した。経済的困窮と就労状況は痛みの発症リスクとなっており、教育レベルの低さは、痛みへの不適切なコーピング方法と関連することによって、痛みの持続期間を長くし、痛みによる生活障害を重くすることが分かった。抑うつ症状は、痛みの回避といった不適切な受動的行動パターンを増やすことで、SESと痛みを媒介する因子であることがわかった(Thomtén et al., 2012)。



他人を信じて相談することの困難

当事者にとっての相談とは？

3つのキーワード

1
支配

2
恥

3
解決

依存症男性の語り

「こどものころから痛みはがまんするものだった。ださい、かっこわるい。わざといためつけた。根性焼きもその一つだったように思う。」

「かっこいいから筋肉つけようとか。こっち来て最初は筋トレやってたけれど半年以上やってない。」

「威嚇するというより、自分自身をそれで自信をつける気がする。」

14

アルコールリズムの社会学

アディクションと近代

再帰性とアディクションの共犯関係



【論理的共犯関係】

再帰性という規範がその論理的対称物としてアディクションを析出する。

同時に、アディクションという觀念の存在が、再帰的な自己というフィクションをリアルなものとして存立させている(p188)。

【作動的共犯関係】

再帰的な自己であるとする努力が、アディクションのプロセスを実質的に駆動する。

×Independence
○ Multi-dependence



依存症者



時間軸上で語ることの困難

「ステップ4からは過去を見て、自分の棚卸しをする。いろんな事を、記憶をたどって書いていく作業。記憶のないところは親に聞いたりして書く。それを徹底的に、余すところなくやる、とワークブックには書いてある。」[A 2015]

「記憶がばらばらなので、それができない人がある。」[A 2015]

13

記憶の特徴と自殺のリスク

- 24研究 (2,595名の被験者)
- ワーキング・メモリー、短期記憶、長期記憶、自伝的記憶の特徴と自殺企図との相関
- 自殺企図歴は、自伝的記憶の具体性の低さや過剰抽象化と有意に相関
- 過去の経験を用いて、現在の課題を解決したり、未来の展望を描くことの困難が、自殺に影響をしている可能性

Richard-Devantoy, S., Berlim, M. T. and Jollant, F. (2014). Suicidal behaviour and memory: A systematic review and meta-analysis. The World Journal of Biological Psychiatry.

